

定住外国人への地方参政権付与、選択的夫婦別姓、人権侵害救済機関設置などにに関する法案が民主党により準備されている。日本の敵たる与党がなぜこのよつた反国家的法案に手を染めようというのか。

私の青春時代、日本の知的状況は不思議なほどまでに自虐的であった。第二次大戦は正義と人道の戦いであり、これに敗れたのが日本であるかのうごとに論じられた。東京裁判史觀が日本人の心を縛り付けてしまっていた。

國益といつものがある以上、戦争が絶えることはない。戦争を倫理で語れるか。戦争には必ず勝者と敗者がいる。敗者が必要なことは敗北への自省であって自虐ではない。旧ソ連軍の侵略により満州へ辛酸を嘗めさせられた父の無念への思いもあって、私は日本の敗戦を貶める気にはなれなかつた。東京裁判とは何か。勝者が正統性を主張するには、敗者を非道なる存在に仕立て非を徹底的に認め

終戦から65年

自虐でなく敗北への自省が必要

正論



拓殖大学学長

渡辺 利夫

保されるや、反米ナショナリズムは一挙に沈黙化した。70年安保とは、日米の一方が1年前の事前通告により条約の自動廢棄を可能とする改定であったが、この時には安保闘争らしきことは何も起らなかった。60年安保闘争が反米ナショナリズムの一時の甘えでしかなかつたことの証左である。

悔に耐えないのは、反米ナショナリズムの沈黙化と同時に第9

条改正をめざす自王憲法制定へのエネルギーもまた萎縮してしまつたことである。安保改定の成功が憲法改正への意気をも阻害させた。実は安保闘争が隠しもつていたのは反米ナショナリズムであった。ナショナリズムとは、他者に本人はこれに強い反対の声を上げた。実は安保闘争が隠しもつていたのは反米ナショナリズムであつた。ナショナリズムとは、他者に投影して自己を確認する国民心理である。

戦後日本にとって他者とは何よりも米国であった。他者が比類なりで、つまり戦後日本の反米ナショナリズムは所謂は庇護者米青年へと成長していくのである。人間の成長過程を心的深層から捉える発達心理学の示唆する通りであり、つまり戦後日本の反米ナショナリズムは所謂は庇護者米青年へと成長していくのである。人間の成長過程を心的深層から捉える発達心理学の示唆する通りであり、つまり戦後日本の反米ナショナリズムは所謂は庇護者米青年へと成長していくのである。

漂流のすえの反国家思想

この間、昭和40年を前後する頃からべトナム反戦運動が多少の高まりをみせたが、日本は戦争の当事者ではない。戦争の惨禍が自國に及ぶことなどありえないという無意識的前提があつての安逸なる反戦運動であった。後に北ベトナムの指導者自身がこの戦争は共産勢力による南北統一戦争であったことを証言しても、反戦運動で名

をなした知識人のすべてが煩かむり、まことに不誠実な反米ナショナリズムであった。

冷戦崩壊を前後する頃からにわかに頭をもたげてきたのが、歴史教科書、従軍慰安婦、南京虐殺、靖国参拝などの「歴史認識問題」である。自虐の情念の矢は米国ではなく、自國の歴史に向けられ始めた。冷戦崩壊により敵が消滅したことができるようになったのである。恐ろしきかな、情念の噴出はついに國家の指導者をまで巻き込んでしまつた。歴史教科書に関する近隣諸国条項、従軍慰安婦問題についての河野談話、戦後50周年に際しての村山談話などがその端的な事例であり、自虐史觀は「制度化」の段階にいたつた。

そして民主党政権は、冒頭の3つの法案に象徴される反国家思想の「制度化」を開始したのである。戦後65年、漂流をつづけてきた政治思想の帰結が国家解体の思想だといふのであれば、日本の再生を願う者は「維新」を唱導し始めるかもしれません。

(わたなべ としお)